

問 い

10月20日(月)。2年生は、画面の向こうに広がる小さな世界を真剣なまなざしで見つめていました。オクリンプラスのボードには、仲間たちの考えが色とりどりに並んでいます。カードを動かし、言葉を重ねながら、「どんなことを聞いたら、まちのよさがわかるだろう」と話し合っていました。

生活科「えがおのひみつたんけんたい」は、三宅島の「笑顔」の理由を探る旅。「ふるさとの湯」「いきいきお魚センター」「ホテル海楽」「図書館」など、島の人々が働く場所を訪ね、その裏にある思いや工夫を確かめようとする学びです。目的は明快、「1年生に伝える」こと。前回のまちたんけんよりも一歩進み、「調べる」から「伝えるために整理する」学びへと歩みを進めました。

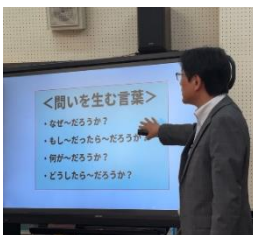
この日は校内研究会の研究授業でした。授業後の研究協議では、「良さとは何か」「整理と分類の違い」「思考の根拠をどう育てるか」といった問いが次々と投げかけられました。

研究主任は、「経験から生まれる問いこそが、自分ごとの学びになる」と語り、授業者は「場所の理解なくして“よさ”は見つからない」と振り返りました。ICTを活用した情報整理が、子供たちの思考の流れを“見える化”し、友達との関わりをより深めていたことも確認されました。



講師の森本康彦教授(東京学芸大学)は、熱のこもった口調でこう話されました。「選ぶことは目的ではなく、学びを支える手段の一つです。大切なのは、どんな問いを立てるか。問いがあるからこそ、整理や分析が意味をもつのです。」

そして、「2年生でここまで探究的な姿を見せる授業は初めて」と、子供たちの真っすぐな姿勢と、先生方の挑戦を高く評価してくださいました。



森本先生は、探究的な学びを「知識と探究を往還する柔らかな道筋」と捉え、「なぜ~だろう」「どうしたら~できるだろう」といった言葉こそが未来をひらくと語られました。

本校が大切にしている「ヒト・コト・モノ」。地域の人(ヒト)との関わり、日々の出来事(コト)、そして身近な環境(モノ)の中で、子供たちは「自分の問い」を見付けています。それは、知識を得る学びから、他者を理解し、世界とつながる学びへと進化していく道です。

情報活用能力とは、単に操作の巧みさではなく、「意味を見だし、他者と共有し、よりよく生きる力」。問いを持ち続けることは、未来を描き続けることです。子供たちが立てた一つ一つの問いが、地域の人々との心をつなぎ、やがて島全体を包む笑顔となることでしょう。



今日も子供たちは、まっすぐな「問い」の先に、遠い未来を見つめています。